和歌における同音異義表現の物象と人事との間の関連性について

フィットレル・アーロン

論文要旨

本研究の大きな目的のひとつは、和歌の同音異義表現をより正確に他の文化に伝達する方法を見出すことである。

同音異義表現の中、当該表現が表す物象の特質などが人事と共通する例が多く、音の共通性の他、内容やイメージの関連性も見出せる。一方、「澪標」と「身を尽くし」や、(葦の)「節」と「伏し」などという、一見内容的な関連性が見出しがたい同音異義表現の場合も、これらの表現が用いられている和歌を検討すると、その関連性が見えてくる。それぞれの同音異義表現の物象叙述に見られる歌語が和歌文学の中に持っているイメージ、あるいはそれと関連する他の歌語を通して、当該歌の内または外に、物象と人事の叙述の内容的な関連が見出せ、連想によって結び付けられる例もある。

本稿では「みをつくし」と葦の「ふし」という同音異義表現を例に、その詠まれ方を検討し、物象と人事の叙述との内容的な関連のあり方について分類を試み、歌語間の連想を中心に、その関連性について考察する。また、「みをつくし」を例に、現在までの外国語訳において、このような関連性がどのように反映されてきているのかについても紹介し、新しい翻訳方法を提案してみる。

キーワード【同音異義表現、掛詞、縁語、連想、外国語訳】

はじめに

稿者は和歌の外国語訳について検討、考察をしているが、その際、和歌における同音異義表現の翻訳方法が大きな課題となる。外国語に翻訳する際、音声の共通性が失われるため、原典においては同音異義表現となっている物象と人事[1)]の関係をどのように捉え、訳出するのかについて考える必要がある。本稿では、「みをつくし」と「葦のふし」という、同音異義表現として用いられている歌語を例に取り上げて、それぞれの歌語の和歌文学におけるイメージを通して、物象と人事の内容との間の関係について考えてみたい。また、こういった同音異義表現が用いられている和歌の外国語訳の中から、稿者が解読できる英訳とドイツ語訳を検討し、物象と人事との関連がどのように表されているのかを見ていきたい。最後に、母語であるハンガリー語、および英語への翻訳実践を行い、翻訳方法の改善について提案を試みたい。

最初に、同音異義表現の外国語訳における捉え方について確認したいが、稿者は以前、『古今集』、『新古今集』、『百人一首』などの二重文脈歌の外国語訳について検討し、翻訳方法を十一種に分類したことがある[2)]。十一種の中で、総数と翻訳書での分布から見ても、採用される方法の上位の三つは、「直喩としての訳出」と、「時間的に・空間的に景物と人事を結びつけること」と、物象と人事の内容の間に、原典にない共通性を構築し、「〜のように」という表現でつなげるという、「直喩の創作」であるということが明らかになった。

同音異義表現の物象と人事の内容的関係について、時枝誠記氏の指摘が注目される。氏は、「あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける」[3)]（『古今集』春下・115・つらゆき）という歌を例にあげて、次のように述べる。

> 「ハル」という音声を契機として喚起せられる二の観念「張る」と「春」との間には、論理的関係を求めることは困難であるから、従って「あづさ弓はるの山辺」という一の連鎖は、論理を超越した一の聯想関係によって結ばれた統一的思想の表現であるということが出来るのである。（中略）掛詞は、その音声の兼用によって文の統一の中に組込まれ、しかも一方その兼用の故に文の論理的脈絡と統一とを断ち切ろうとするのである。ここに論理的脈絡よりも更に直接的な観念の響合を表現することが出来る。それは言語の論理性を絵画的表現に転換せしめる一の技巧といい得るであろう[4)]。

また、吉野樹紀氏は、掛詞は文学的表現であるとはいえ、日常表現でもあると主張し、掛詞を含む、または掛詞として機能する景物などの物象は、掛詞のいま一方である人事に関わる内容も含んでいると述べている[5)]。さらに、小野小町の「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（『古今集』雑下・938）という歌を例に取り上げて、物象内容と人事内容の特質が類似する場合もあることについて言及する。さらに、「みるめ」などの海に関する掛詞や縁語が、恋の不可能性を表すものとなると述べている。

しかし、吉野氏のあげているような類似性が見出せない例も少なくない。また、時枝氏と吉野氏も、同じ和歌の中での聯想関係、または類似する内容を対象としているが、歌語という、定型のイメージを持つ表現によって、当該歌に限らず、連想関係が成り立つことが考えられ、このような連想関係を通して一見内容的な関連が見出せない同音異義表現の物象と人事との間にも、それが認められると思われる。そこで、時枝氏と吉野氏の指摘も踏まえて、内容的な関連を基に、同音異義表現が含まれている歌の分類を試みる。

1．同音異義表現の物象と人事との間の内容的関連の性質による分類の試み

先行論においては、小田勝氏によって、古典和歌のレトリック体系の再分類が行われている。そこでは掛詞を「諷喩」と「同音接近」と「異語反復」に分類し、「有明の月もあかしの浦」などといったタイプは「異語の兼用」の一種に分類する[6)]。しかし、この分類の根拠

は、掛詞として用いられている言葉は、別の歌では反復などの形で出てくるということであり（たとえば、「木の芽もはるの雪降れば」という語句の「はる」は、別の歌では「木の芽はる春の山辺」と見えるため、「同音接近」とする）、それぞれの歌で同じ語が異なる修辞法として織り込まれていることを念頭に置いた分類とはいえない。

本稿では、掛詞などの同音異義表現の物象と人事との関連を、具体的にそれぞれの和歌の中で見て、どのように内容的な関連が成立し得るのかを基準として、関わりの可能性として以下の四種を考えてみた。

① 物象・人事の特質の類似性（当該歌の内）

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

（『古今集』雑下・938）

② 縁語による関連（当該歌の内）

うきめのみおひてながるる浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

（『古今集』恋五・755）

こひわたるなみだのかはのふかきえにみをつくしてもあひ見てしかな

（『千五百番歌合』恋一・2321）

③ 歌語のイメージによる連想（当該歌外）

わびぬれば今はたおなじなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

（『後撰集』恋五・960）

えにしあればなにはの蘆根よしや我がうきふしぶしもよよのむくいぞ

（『宝治百首』雑二十首・3485）

④ 本歌・本説による連想（当該歌外）

難波なるみをつくしてのかひもなしみじかき蘆の一よばかりは

（『拾遺愚草』2570）

右の①～④の分類は、歌語または同音異義表現を分類するものではなく、具体的に一首一首の歌を分類する試みとなっている。また、本稿で取り上げる和歌にこの①～④の番号を付けたが、一首の和歌は必ずしもひとつの種類に属すのではなく、その中の同音異義表現の文脈における位置によって複数の種類が合わさっている場合が多い。①の「物象・人事の特質の類似性」として、たとえば、吉野氏も取り上げた小野小町の「わびぬれば」歌のうき草があげられる。②の「縁語による関連」というのは、同じ歌の中に、複数の同音異義表現と他の縁語を通して、物象と人事との内容的な共通性、または類似性が成り立つことをいう。たとえば、吉野氏もあげた、「うきめのみ」歌には「うきめ（浮き布）」が頼りなさを連想させ、「流るる」には「泣かるる」という意味も含まれ、あるいは涙が「流るる」ことに連想できることによって、物象と人事との内容的な関連が成立する。あるいは「こひわたる」歌の場合、長い間恋するという意味の「こひわたる」ということと川を渡ること、また涙の川の深

さと川の深い江とがそれぞれ二つ（景物と人事）の文脈を作り、これによって、涙の深さの中に「身を尽くす」ことと川の深い江に立つ「澪標」という二つの事柄の間にも内容的な関連性が成り立つ。さらに、「みをつくし」は初句の「わたる」と縁語関係にあり、「澪標」は「(川を）わたる」ことと関連し、「身を尽くし」という叙述も長い間何かをするという意味の「(こひ）わたる」と呼応し、それぞれが内容的に結びつくことになる。③の「歌語のイメージによる連想」の場合、右の「うきめのみ」歌に見られる「かりに（刈りに・仮に)」という同音異義表現に関しても、物象と人事との間の内容的な関連が直接には見出せない。また、後ほど詳細に見る元良親王の「わびぬれば」歌に見られる「みをつくし」と為家の「えにしあれば」歌に見られる「ふしぶし」に関しても同じである。この場合は、その歌語のイメージを参考にして、その内容的な関連が見出せることになる。最後に④の「本歌・本説による連想」は、同音異義表現の物象が表していることが、それが用いられている本歌または本説の内容と関連がある、というものである。

次に、特に③と④に注目して、「みをつくし」と「葦のふし」が詠まれている和歌を数例取り上げて検討していきたい。

2.「みをつくし」のイメージと同音異義表現としての働き

2.1. 同音異義表現でない例―「澪標」の性質によるイメージ―

(1) あてにするもの、頼りにするもの

水路の道しるべである澪標は、どの場合にも同音異義表現であるわけではない。その性質からして、あてにするもの、頼りにするものであり、人事の叙述にその喩えとして用いられる次のような例があり、『万葉集』から見られる用法である。

等保都安布美　伊奈佐保曽江乃　水乎都久思　安礼乎多能米弖　安佐麻之物能乎
(とほつあふみいなさほそえのみをつくしあれをたのめてあさましものを)

(『万葉集』十四・3429)

かはなみもうしほもかかるみをつくしよする方なきこひもするかな

(『古今和歌六帖』第三・みをつくし・1962)

(2) 詠歌主体が自分（の心）を澪標に擬える

その他、水の中に立っているものであるため、次の二首のように、詠歌主体が自分、または自分の心を澪標に擬えるという例もある。

(寛平御時きさいの宮の歌合のうた)　　藤原おきかぜ
君こふる涙のとこにみちぬればみをつくしとぞ我はなりぬる

(『古今集』恋二・567)

右　　経家

きみゆゑになみだの川にゆらさるるみをつくしともなりはてねとや

(『六百番歌合』二十一番・762)

2.2. 同音異義表現として

(1)「難波」と関連して

「みをつくし」が水路の「澪標」と「身を尽くして」という同音異義表現になっている早い例は、『百人一首』にも選ばれた元良親王の有名な歌である。

事いできてのちに、京極御息所につかはしける　　もとよしのみこ

わびぬれば今はたおなじなにはなるみをつくしてもあはんとぞ思ふ（③）

(『後撰集』恋五・960)

この歌では、物象と人事との間に内容的な関連性が一見見られない。しかし、難波が詠まれている、先行する、または同時代の歌を見ると、以下の歌のように「わたる」が出てくる歌が見出せる。

(題しらず)　　(よみ人しらず)

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのの島にたづなき渡る

(『古今集』雑上・913)

身のうれへ侍りける時、つのくににまかりてすみはじめ侍りけるに　業平朝臣

なにはづをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟

(『後撰集』雑三・1244)

難波と関連する「わたる」という表現によって「長い間何かをする」ということが思い起こされ、「身を尽くす」という人事の内容との類似性が成立すると考えられる。これが次の皇嘉門院別当の歌になると、五句目に「わたる」という言葉が含まれているため、縁語として機能し、②に分類できる。

摂政右大臣の時の家の歌合に、旅宿逢恋といへるこころをよめる

皇嘉門院別当

なにはえのあしのかりねの一よゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき（①②）

(『千載集』恋三・807)

また、①も認定したが、それは点線を付した上句の「かりねの一よ」について指摘でき、刈りとられた後の葦の根茎と仮初の共寝が同じく短いという点で、類似性が認められることによる。

次に、定家の歌をあげる。

建保四年内にて、寄蘆恋

難波なるみをつくしてのかひもなしみじかき蘆の一よばかりは（④）

（『拾遺愚草』2570）

この歌は④「本歌または本説による連想」と分類した。初句と第二句、「難波なる身をつくしての」という部分は先ほど取り上げた元良親王の歌を、第三句、「かひもなし」はこの小節の（3）にあげる『源氏物語』澪標巻の明石君の「数ならで」歌を本歌としていると思われる。下句の「みじかき葦」は後に取り上げる、『百人一首』にも入っている伊勢のものとされている「なにはがた」歌（以下、伝伊勢歌と称する）、「一よ」は皇嘉門院別当の「なにはえの」歌の本歌取りであると見られる。元良親王と伝伊勢歌と明石君の歌も響いているが、表されている気持ちは皇嘉門院別当の歌に応答するかのようになっている。要するに、別当の歌では、一夜の仮初の契りであったものの、身を尽くして相手のことを恋し続けるはずなのか、という疑問、困惑が表されていると思われ、それに対して定家の歌は、その甲斐がない、と答えていると読むことができる。

（2）「えに（江に・縁）」

次に注目したいのは『源氏物語』澪標巻の光源氏と明石君の贈答である。

（光源氏）

みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな（②③）

（明石の君）

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ（②③）

（『源氏物語』澪標巻［260〜261］）

光源氏の歌には澪標の縁語として、澪標としばしば一緒に詠まれる「しるし」が出てくるが、それだけでは「身を尽くす」という人事の内容との関連が見出せないと思われる。そこで、下句の「江」と関連する、「長い間何かをする」という意味もある「わたる」が浮上する。また、歌の下句には「みをつくし」とよく一緒に詠まれている「江に」と「縁」の掛詞があるが、入り江が深いと縁が深いという類似性が認められる。こういうことで、縁語の連想を通して物象と人事との関連が成立するところもあり、分類②にも入る。先ほど触れた明石君の返歌である「数ならで」歌でも、「なには」と「かひ」という縁語によって物象と人事の関連が見出せる（②）が、「身を尽くす」という部分が具体的に、「難波」と関連する「わたる」への連想を通して、内容的な関連が成立する（③）といえる。

次の俊成の歌は、「寄源氏名恋」という題からも明らかなように、源氏と明石君の贈答を踏まえているため、④に分類できる。

寄源氏名恋

うらみても猶たのむかなみをつくしふかきえにあるしるしとおもへば（②④）

（『長秋詠藻』354）

また、この歌では深い入り江にある澪標という物象内容と深い縁の「しるし」という人事の

内容との間に、「うら」と「え」と「しるし」という縁語によって、深い江に立つしるしである澪標という具体的な情景はそのまま深い縁のしるしという抽象的な意味合いでも機能するという関連が見られるため、②の関連性も認められる。

(3)「まつ」

「まつ」が出てくると、長寿であり、常住不変の象徴である松の木と、長い間待つということによって「澪標」と「身を尽くす」との関連も成り立つと思われる。恋人を待つ女の相手への心が不変であることも、暗に含まれている場合があると考えられる。

みをつくし

ふくかぜにまかすることもみをつくしまつとしりてやさしてまつらん（②）

（『忠見集』7）

この歌では、「澪標」と「松」が縁語関係にあり、吹く風に任せられて動いている松と、具体的には出てこないが、風に任せられており、澪標を「さして」（目指して）漕ぐ船の情景と、男の心に任せられているにもかかわらず「身を尽くし」て「待つ」女の境遇という内容的な類似性は縁語群によって成立する。

(4)「朽つ」

「まつ」は以下の『堀河院艶書合』の俊頼の歌にも、松の縁語でもある「住吉」と一緒に出てくる。これにより、前項で述べた松の木と待つことの類似性を通して内容的な関連が成り立つと思われる（②）。

左京大夫俊頼

数ならで世にすみの江のみをつくしいつをまつともなき身なりけり（②）

かへし　　中宮上総

ながれてもあふせは絶えじ住江のみをつくしてもくちはててなん（①②）

（『堀河院艶書合』15〜16）

俊頼の歌に見られる「すみの江」の「すみ」に「住み」が掛けられており、この世に住むことと待つこと、および松と澪標と似たように長い期間同じ場所に関わる状態であり、同じく長い間行う身を尽くすことも加えて、縁語群によって物象内容と人事の内容との間に類似性が成り立つと思われる。一方、上総の返歌に「朽つ」が詠まれている。水路の澪標が朽ちると詠歌主体が長い間身を尽くして人生が終わる、というように、この場合には性質上の類似性が成立し、①に分類できる。また、波線を付した「ながれて」は澪標の縁語でもあり、身を尽くすこととも、詠歌主体の人生が流れるという意味合いで関わっている。さらに、ここで注目したいのは、「みをつくし」に関して「朽つ」が詠まれている歌に、右の上総の歌が初出例であり、院政期以降の詠まれ方となっていることである。このように和歌表現の発展

と拡大が見られ、掛詞と縁語関係も豊富になるが、これによって物象と人事の間の類似性が成立する場合もある。それぞれの同音異義表現などの歌語のこういった和歌史における変遷について明らかにすることも重要である。

上記の例の他、12 世紀以降、「みをつくし」と「朽つ」が詠まれている歌に以下のようなものがある。

和歌所歌合に、忍恋をよめる　　摂政太政大臣

なには人いかなるえにかくちはてむあふことなみにみをつくしつつ（①②）

（『新古今集』恋一・1077）

（遇不逢恋）

思はずは今は難波のみをつくしわが名もたつな朽ちははつとも（①）

（『洞院摂政家百首』恋・1300・内大臣実氏）

『新古今集』の良経の歌では、江にずっと立っている澪標が波に打たれて朽ちることと、詠歌主体が前世からの因縁（「えに」）によって恋い慕っている人と会うことができないものの、身を尽くしており、人生が終わる（「朽ち果てむ」）という内容が類似しているため、澪標と身を尽くすことの関係の場合は①の関連性が認められる。一方、「江に」と「縁」、「波」と「無み」は縁語群をなすことによって内容的な関連性が見出せるようになるため、②の関連性となる。

実氏の歌では、「みをつくし」と「朽ち」が同音異義表現として機能し、他の 2 首と同様、物象と人事との間の類似性が見出せる（①）と思われる。

2.「（葦の）節」のイメージと同音異義表現としての働き

葦は弱くてしおれやすい。また水の中に生えるため、根は水の下にあり、茎が流され、水に弄ばされることもある。このような特徴により、澪標に比して人事関連の事柄とイメージが比較的関連しやすい面がある。代表的な例は 2.1. 以下に見るが、和歌における葦のイメージについて簡単にまとめてみると、次のような関連語彙が見られる。

「しげし」、「刈る（刈り・仮）」、「ふし（節・伏し）、短い節、裏葉、若葉、「したね（下根・下音）」、「あし火」、「しをれ」、「うきね（浮き根・憂き音、憂き寝）」

2.1.「（葦の）節」・「伏し」

葦のふしと同音異義表現となっているのは寝るという意味の「伏し」と「折節」である。まずは前者を見ていきたい。

（1）節間が短い

なにはがたみじかきあしのふしごとにあはでこのよをすぐしてよとや（①③）

（西本願寺本三十六人集系『伊勢集』429）

有名な伝伊勢歌の第三句は、西本願寺本系統の『伊勢集』には「ふしごとに」となっているが、正保版本歌仙歌集本系や冷泉家時雨亭文庫蔵の『伊勢集』と、『新古今集』や『百人一首』などの中世の歌集には「ふしのまも」となっている。塚原鉄雄氏は、植物学の研究などを取り上げて、葦の地上茎の節間は長く、短いのは地下茎、つまり根茎の節間であると指摘し、そのような関係で「ふし」に「伏し」も掛けられており、「根」の関係で「寝」と連想関係が成立すると述べる[7]。また、長谷川哲夫氏が指摘するように、この和歌を本歌としている中世の歌では、「ふしのま」は寝ている間という意味であり、少なくとも『新古今集』や『百人一首』の歌としてはこのように解釈する方が妥当である[8]。このように解釈すると、「短き葦のふしのま」は短い間寝ることとなる。短い葦の節と寝る時間、または共寝の時間が短いということは類似する（①）が、葦の「節間」と、寝ている間という意味の「伏しの間」の間に、直接の関連性は見出しがたいといえる。そこで、次の『新古今集』の歌に見られる、葦と一緒に詠まれることがある「したね（下根・下音）」への連想を介することで、葦の「節間」と「伏しの間」との間に、詠歌主体が独り寝の悲しさの中で泣いているという関連が見出せる（③）。

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に　　権中納言師俊

つれもなき人の心のうきにはふあしのしたねのねをこそはなけ

（『新古今集』恋一・1076）

（2）「うき（浮き・憂き）」、「乱る」

以下の用例からわかるように、葦の「節」と「伏し」が「浮き」と「乱る」と一緒に詠まれている場合は、本来類似性が認められる傾向がある。

あしのねのよわき心はうきことにまづをれふしてねぞながれける（①②）

（『古今和歌六帖』第三・「うき」・1690）

右　　雅経

ほにはいでじあしのふしばのしたみだれいりえのなみにくちははつとも（①）

（『千六百番歌合』恋一・2303）

『古今和歌六帖』の歌では、初句と第二句も譬喩関係にあるが、「うきこと」に折れ伏すのは葦についても、また詠歌主体の心情についてもいえることであり、①に分類できる。また、末句の「ねぞながれける」は「根ぞ流れける」という意味で葦の縁語でもあり、「音ぞ泣かれける」という人事の叙述も掛けられているが、このような縁語も、物象と人事の叙述を関連付ける（②）と考えられる。「乱る」が詠まれている雅経の歌に見られる「あしのふしば

のしたみだれ」と「なみにくちははつ」という情景はそのまま、忍恋の気持ちで密かに苦しみ、たとえ死んでしまっても表に出したくないという詠歌主体の心情を表すものであり、物象と人事との類似性が認められる（①）。

（3）「刈りに」・「刈り根」

「刈りに」（「仮に」）と「刈り根」（「仮寝」）の場合は、「刈りに」と「葦」と一緒に詠まれることが多い「乱る」が想起される。

（江葦）　　師継

三島江の玉えの蘆をかりにきてふしうきよはも夢は見えけり（③）

（『宝治百首』3494）

この歌に見られる「ふしうきよは」に関連して、詠歌主体の心の乱れという関連性が、刈り取られた葦の乱れを通して成立すると思われるため、③に分類できる。刈り取られた草などの乱れは『万葉集』以降見られ、心の乱れとも結びついている。

為妹　寿遺在　苅薦之　念乱而　応死物乎

いもがためいのちのこせりかりこものおもひみだれてしぬべきものを

（『万葉集』巻十一・2764）

（題しらず）　　（よみ人しらず）

かりこもの思ひみだれて我こふといもしるらめや人しつげずは（『古今集』恋一・485）

（述懐歌のなかに）　　前中納言資平

なにかそのなにはのあしのかりの世にうきふしとても思ひみだれん

（『続拾遺集』雑上・1121）

（島鶴）　　高倉

浪かかるおきのこじまにあしたづの思ひみだれてうき音鳴くなり

（『宝治百首』雑二十首・3429）

（4）「葦の屋」

次に、「葦の屋」と「ふし」が詠まれることもあるが、「葦の屋」は仮寝の宿りであり、葦の節と寝るという「伏し」が内容的に関連することになる。

（芦屋里）　　定家朝臣

蘆のやのかりねの床のふしの間にみじかく明くる夏のよなよな（①④）

（『最勝四天王院和歌』76）

定家の歌の場合は、この類似性に加えて皇宜門院別当の「なにはえの」歌と伝伊勢歌である「なにはがた」歌が本歌として踏まえられているため、④の関連性も認められる。

2.2.「(葦の) 節」・「(折) 節」

「折節」という意味の「ふし」と同音異義表現になっている「葦の節」は、同じく「うき」と「乱る」、また「しげし」という、人事との内容的な関連が成立しやすい表現と一緒に詠まれることが多い。たとえば、以下のような例がある。

恋

かくとだにいはぬにしげきみだれあしのいかなるふしにしらせそめまし（①②）

（『待賢門院堀河集』70）

厭離穢土

にごりえに猶しもしづむ蘆のねのいとふふしのみしげきころかな（①②）

（『拾遺愚草』2978）

（江葦）　　為家

えにしあればなにはの蘆根よしや我がうきふしぶしもよよのむくいぞ（③）

（『宝治百首』3485）

待賢門院堀河の歌では、「いはぬ」に掛けられている「岩沼」と「言はぬ」の場合、岩の間にある見えない沼と、言われないため人に知られない心情との間に類似性が見出せる（①）。また、縁語として機能する葦と心情に関しても用いられている「しげし」と「みだれあし」により、景物と人事の二重の文脈が形成され、「葦の節」と「折節」との間にも関連性が成立する（②）。

定家の歌に見られる「しげし」という縁語が同じように機能し、水底に沈む葦の根と煩悩に沈む詠歌主体の心情との間に類似性が認められる（①）。一方、「ふし」の両方の内容との間に、他の掛詞と縁語を通して関連性が出来上がる（②）。

為家の歌の場合は、以前見てきた、「深し」と一緒に詠まれることが多い「えに」と、たとえば「わたる」と一緒に詠まれる「難波」を通して、世世にわたっての因縁によって憂きことが多いという内容の広がりの可能性がありうるのではないかと思われる。

3. 和歌間の歌語のネットワーク

以上、二例を取り上げて、同音異義表現の物象と人事との内容的な関連について検討した。図１では、先ほど見てきた例を基に、「みをつくし」とそれと関連する歌語について簡単に示してみたが、このように一次的に、また二次的に歌語がつながり、ネットワークが形成されていたことが考えられる。ここでは「みをつくし」が中心となっているが、いうまでもなく、他の歌語についても似たようなネットワークができあがる。

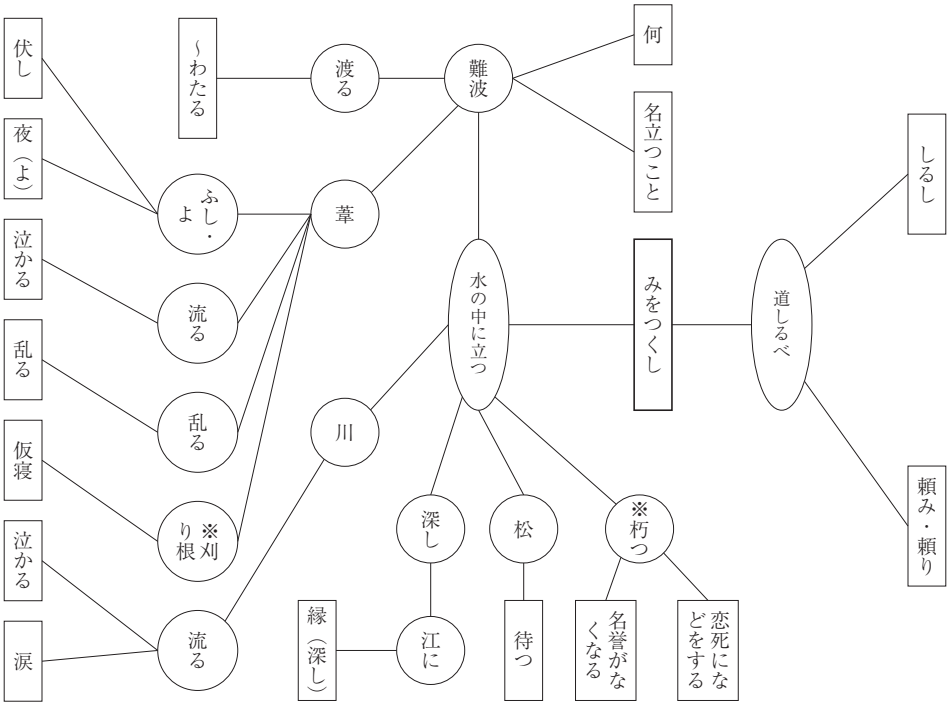

図 1　「みをつくし」に関連する歌語のネットワーク（「※」印は院政期以降初出の表現。「みをつくし」以外の四角で囲った表現は人事の叙述関連のもの。）

このような歌語のネットワークの存在を傍証するものとして、『和歌初学抄』と『八雲御抄』に見られる、景物とそれらに関わる次のような語句のリストがあげられる。

みだれたる事には

シノブモヂズリ　カルカヤ　シヅハタ　アサネガミ　カリゴモ　カヤガシタヲレ　アシガキ　イト　アマノカルモ　ヤナギノイト

（『和歌初学抄』「秀句」）[9]

葦　みたれ　しほれ　（中略）　あしかきはまちかしともおもひみたれてとも云

（『八雲御抄』第三　枝葉部）[10]

「みをつくし」については、管見の限り見当たらないが、葦に関して「みだれ」や「しをれ」という語が取り上げられており、2.1. に見た人事の内容との関連を連想させる。また、『和歌初学抄』では「みだれたる事」として「刈萱」と「刈り菰」などの刈り取られたものも取り上げられており、「刈る」と「乱る」が連想関係にあったことが明らかである。

4. 外国語訳における「みをつくし」の訳出

次に、和歌の外国語訳において、これまで見てきた歌語のネットワークと物象と人事との

関連がどのように反映されているのか、またどのような改善の可能性があるのかについて見ていきたい。例として、元良親王の「わびぬれば」歌と皇嘉門院別当の「なにはえの」歌と『源氏物語』澪標巻の源氏と明石君の贈答歌の主な英訳とドイツ語訳における「みをつくし」の翻訳を検討する。

4.1．元良親王の「わびぬれば」歌の翻訳

「みをつくし」の翻訳として、人事の叙述のみ、つまり同音異義表現の一方だけが翻訳されている例が多く、たとえば『百人一首』の最初の外国語訳であると同時に日本の古典和歌の最初の西洋の言語への翻訳でもあるディキンズ（Frederick Victor Dickins）の１回目の翻訳にも同様である。

Distracted by my misery,	悲痛に取り乱されていて、
How utterly forlorn am I;	どれだけ私がわびしいのだ。
Oh that I might thee once more see	ああ、もう一度君に会いたい、
Tho' it should cost my life to me!	たとえ私の命が犠牲になるにしても！[11]

(Dickins, 1866, p. 6)

一方、掛詞「みをつくし」の両方の内容を訳出している早い例としてエンデルリング（Paul Enderling）のドイツ語訳がある。

Der Boje gleich…	浮標のように……
Der Boje gleich im Hafen von Naniva,	ナニワの港の浮標のように、
Zur Tiefe bald und bald zur steilen Höh'	しばらくは深きに〔沈み〕、しばらくは高きにあがり、
Wirbelt mein Herz, das der Gedanke peinigt,	私の心が動揺し、いつようやく、ようやく
Wann ich dich endlich, endlich wiederseh'!	君をまた見るかという思いに悩まされて。

(Enderling, 1905, S. 59)

これは、本稿の最初に言及したとおり、掛詞の外国語訳に多く見られる「直喩の創作」の一例である。柱である「澪標」が水面に浮いている浮標として訳出されていることも原典と大きく異なるが、「身を尽くす」という内容も、波に弄ばされている浮標との直喩関係により、詠歌主体の心が、いつ相手と会えるのかに関する不安で動揺するという内容に変わってくる。

エンデルリングの翻訳を参照しているというクルト（Julius Kurth）のドイツ語訳は、人事の内容の面ではエンデルリング訳に比して原典に近い。しかし、詠歌主体が辛くなる場所として難波を訳し添えるという訳出方法（物象と人事の叙述を空間的に結びつける）をとっており、「澪標」と「身を尽くし」の本来の関係性が失われている。

Dennoch.	それでも

Am meinen Kummer	私の悲しみは、
Darf ich mich jetzt nicht kümmern!	今は気にしなくてよい！
Ob in Naniwa	たとえナニワに
Mein Leib auch abgehärmt ist,	私の身が辛くなるにしても、
Ich muß – ich muß sie treffen!	私は彼女に会わなければならない！

（Kurth, 1909, S. 43）

クルトの翻訳書は上代から近代までの和歌や俳諧などの韻文を翻訳したアンソロジーであり、翻訳者は序文に、先行するドイツ語訳であるエンデルリング訳とフローレンツの最初の日本詩歌翻訳書[12]に対し、原典の詩形を保持し、日本語の多義性をドイツ語の多義性を活用して伝達することを心掛けたと書いている。しかし、「みをつくし」という掛詞の物象と人事の内容の関連がドイツ語の多義的表現を通して表しがたかったようであることが、「澪標」が訳出されていないことなどからうかがわれる。

次のポーター（William N. Porter）の英訳のように、「みをつくし」が「潮」と変わり、その高さが寿命を測るという、エンデルリング訳と似たように、元良親王の歌の原典と内容が大きく異なる翻訳も見られる。

We met but for a moment, and	私たちは一瞬しか会っていないが、
I`m wretched before;	私はもう不幸だ。
The *tide* shall *measure* out my life,	*潮*は私の寿命の終わりを*測る*、
Unless I see once more	もしもう一回見ることができなければ、
The maid, whom I adore.	私の慕っている娘を。

（Porter, 1909, p. 20, 斜字本文）

カーター（Steven D. Carter）の英訳は直喩の創作の典型的な例であり、「澪標」を浮標と訳出する。

Like a channel buoy	水路の浮標が
bobbing off Naniwa strand,	ナニワの海岸に揺れるように、
my name is tossed about.	私の名が弄ばれている。
But still I will come to you——	だがそれでも君のところに行きたい、
though it be death to proceed.	それで死に向かっていくにしても。

（Carter, 1991, p. 211）

二重傍線部のように、「like」（〜のように）を用いて難波の澪標の情景と噂の対象となるという詠歌主体の心情を結びつける。また、詠歌主体の名と澪標との間の共通性を、澪標を波に弄ばれる浮標と替えることで構築する。いうまでもなく、浮標と澪標のイメージが異なり、浮標は和歌表現として見当たらない。なお、カーターは、「なにはなる」に「名にはなる」が掛けられていると捉えているようであるが、『百人一首』の解釈史の中で、一部の古注に

このような解釈が見られ、「今はた同じ名にはなる」と見、たいてい、元良新王と京極御息所の関係が露顕したため、浮名が立ったので、また会うにしても、その浮名に変わりはない、と解釈されている。しかし、このような解釈は、2.2. にあげた詞書が付されている『後撰集』の歌として詠む場合に限って可能であるといえよう。

次にモストー（Joshua S. Mostow）の英訳を見たい。

Miserable,	わびしいことだ、
now, it is all the same.	今は何でも同じだ。
Channel-markers at Naniwa——	ナニワの水標棹—
even if it costs my life,	たとえそれで命を捧げることとなるにしても、
I will see you again!	またあなたを見たい！

（Mostow, 1996, p. 201）

傍線部のように、「みをつくし」は「Channel-markers at Naniwa」、「ナニワの水標棹」と訳されているのみである。この表現の中に人事の内容が暗に含まれているという意図での翻訳かもしれないが、モストー氏の著作には掛詞の説明も付されているため、それと合わせて読むと、和歌表現を知らない読者も理解できると思われる。

マクミラン（Peter MacMillan）は、難波の「澪標」の名前が「自分を犠牲にすること」（身を尽くすこと）を意味するというように、重ねられている二つの語句の音声関係を基にして、その意味内容を関連付ける翻訳をする。

I'm so desperate, it's all the same.	私はあれほど絶望的で、何も同じだ。
Like the channel markers of Naniwa	ナニワの水標棹のように、
whose name means 'self-sacrifice',	その名の意味は「自分を犠牲にすること」、
let me give up my life	私の命を諦めさせておくれ、
to see you once again.	君ともう一度会えるために。

（MacMillan, 2018, p. 26）

二重下線部のように、ここにも「like」を用いて直喩が創作されているが、物象内容と人事の内容との間に内容的な共通性を構築するのではなく、波線を付した 3 行目に、音声上のつながりを明らかにするところが、これまで見てきた翻訳と異なる趣向である。興味深い試みであるが、説明的であり、韻文としての流れと文体に相応しくないのではないかと思われる。

4.2. 皇嘉門院別当の「なにはえの」歌の翻訳

次に皇宜門院別当の歌の翻訳を見るが、ディキンズが 1866 年の『百人一首』翻訳に、この歌についてのみ、言葉遊びが多く、翻訳が不可能であるという説明をしたうえで、翻訳を見送った。これは、この歌が特に翻訳しづらいことを物語る。

本稿ではまずポーター訳を見たいが、澪標はあなたへの愛を測ることができない、という

ように、元良親王の歌と同じく、原典と異なる内容となっている。

I`ve seen thee but a few short hours;	あなたを短い間にしかみていない、
As short, they seemed to me,	それは私に
As bamboo reeds at Naniwa;	ナニワの葦のように短く感じられた。
But tide-stakes in the sea	しかし海の潮の竿は
Can`t gauge my love for thee.	私のあなたへの愛を測ることができない。

（Porter, 1909, p. 88）

カーター訳も同じで、澪標は元良親王の歌と同様、「buoy」（浮標）として訳出されている。

Because of one night——	一夜のため—
brief as the space between joints	ナニワの葦の節の間のように
on Naniwàs reeds——	短い—
am I to be a buoy,	私は浮標でなければならないのか、
tossed by waves of love?	恋の波に弄ばれて。

（Carter, 1991, p. 233）

柱である澪標とイメージがかけ離れており、「waves of love」（恋の波）という和歌表現も見当たらないため、前掲のカーター訳と同じ問題を有する。

一方、以下のモストー訳は注目される例であると思われる。

Due to that single night
of fitful sleep, short as a reed`s joint cut at the root
from Naniwa Bay,
am I to exhaust myself, like the channel-markers,
passing my days in longing?
（Mostow, 1996, p. 400）

〔その一夜の断続的な共寝のため、（それは）ナニワ江の根に切られた葦の節のように短い、私は澪標のように自分を老朽させなければ / 疲れ果たさなければならないのか、毎日を物思いで過ごしてしまって。〕

モストーは直喩として翻訳するが、「exhaust」という言葉は物などが「老朽する」と「疲れきる」という意味もあり、詠歌主体と澪標に関しても使える。要するに、一語で物象と人事の内容とも関わることが表されている。また、先ほど「みをつくし」と一緒に詠まれる歌に、澪標と詠歌主体にも関わる表現として「朽つ」を見たが、それと似ている趣向ではないかと考えられる。さらに、「みをつくし」と「朽つ」が院政期から一緒に詠まれるようになったため、皇宜門院別当の歌の場合、和歌史から見ても、内容的な関連性について考える際、参考になるといえる。

この歌には、他にも英訳とドイツ語訳が複数件あるものの、掛詞「みをつくし」は人事の

内容（「身を尽くし」）が訳出されているのみで、「澪標」を織り込むことが困難であることを改めて確認できる。

4.3.『源氏物語』澪標巻での光源氏と明石君の贈答の先行翻訳

『源氏物語』の英訳とドイツ語訳の中には、澪標巻での光源氏と明石君の贈答にある「みをつくし」の物象内容が、先ほど見た2首の歌と同様、翻訳されていないものが多く、澪標に相当する訳語も見られるのは3種の英訳のみである。今回、その中から2種を紹介する。ひとつは、『源氏物語』の全ての和歌を抜粋し翻訳したクランストン（Edwin Cranston）の翻訳書のものである。

I have spent myself	わけもなく
Not for nothing in this love——	この恋に自分を費やしたのではない—
These channel markers	この水標棹は
Standing deep within the tide	潮の中に深く立っていて、
Measure the fate of our meeting.	私たちが逢うという縁（の深さ）を測る。
Not worth numbering	ナニワの貝の中に数えられる
Among the shells of Naniwa,	価値がなく、
I am left to ponder	独りで考え込んでいる、
Why I started out longing	なぜ私は憧れはじめたのか、
For the markers of such a tide.	このような潮 / 機会の水標棹に。

（Cranston, 2006, pp. 782–783）

源氏の歌の翻訳では、澪標が潮水の中に深く立ち、二人の逢瀬を測っているというように、澪標に関わる語である「しるし」を活用しての訳出である。また、明石君の歌の翻訳では、源氏の歌の表現を受けて、詠歌主体が、なぜ自分たちの逢瀬を示す水標棹に憧れはじめたのかについて考え込んでいる、という内容である。また、「tide」には「機会」、「時節」という意味もあり、会う機会という意味も活用されていると考えられる。要するに、源氏の歌では、水に深く立っている澪標が二人の逢瀬の縁の深さを測るものとして、複合した譬喩の形で出てきており、明石君の返歌では、「tide」という語の多義性も活用して、縁の深さを測る澪標への憧れを通して、源氏への憧れが表されていると思われる。澪標は水量などを測るものではないため、本来の概念から逸脱しているものの、前出のポーターやカーターの翻訳のように、原典と大きく異なる内容となってしまうという問題はない。

次に、ウォッシュバーン（Dennis Washburn）による翻訳を見たい。

How deep the destiny that guides our hearts	私たちの心を案内した運命がなんて深い、
Like the channel markers leading us here	私たちをここに導いた水標棹のように。

Showing how deeply I channelled my love	どれほど深く私の恋心を流したのかを示す。
As one whose status is of no account	地位が数にならないものとして、
Whose vain life has little purpose being	虚しい人生が少しの目的しかなかったもので、
Why have I channelled all my thoughts on you	なぜ私は全ての思いをあなたに流したのか。

（Washburn, 2015, pp. 332–333）

源氏の歌の翻訳では、二人を難波の地に導いたのが澪標であるという設定になっており、縁の深さと源氏の明石君への思いの深さを対比し、前者を後者のしるしである澪標の情景と結び付けて、直喩を創作する。縁の深さと思いの深さを澪標が示しているという点で、クランストン訳と類似する発想である。ここで注目したいのは、二重傍線を付した「channel」という語の活用である。この語は動詞として、水路を通して何かを流す、運ぶという意味もあると同時に、情報などを流す、伝える、また関心や感情を向ける、という用法もある。源氏の歌の翻訳では、彼から明石君へ恋が向けられていることを、明石君の返歌の翻訳では明石君から源氏へ思いが向けられていることを、この多義語によって表している。一方、源氏の歌の翻訳では直喩の創作によって、「深い」という語を通して縁と澪標との間に共通性が構築されており、明石君の歌では、「難波」と「何は」、「貝」と「甲斐」の掛詞が省かれているのみではなく、「澪標」も見られず、物象の面がほぼ含まれていないという問題が残る。

4.4.『源氏物語』澪標巻での光源氏と明石君の贈答の試訳

この贈答では、情景の面は「澪標」と「しるし」と「江に」、および「難波」と「貝」と「澪標」の縁語関係によって現れるのみで、クランストンとウォッシュバーンの翻訳のように「澪標」が何かを示すしるしとなっているという設定ではない。以下、原典のような縁語による物象の描写、かつ物象と人事が同等であるという同音異議表現の本質をより正確に伝える試訳を紹介したい。まずは稿者の母語であるハンガリー語への試訳である。

Vízi útjelzők —	澪標—
éltem végéig folyvást	寿命が終わるまでずっと / 流れて
szeretlek. Jele,	（君を）愛する。そのしるしは、
hogy itt is találkoztunk.	ここでも会ったことだ。
Milyen mély sorsunk öble!	私たちの縁の江はなんて深いことだ！
Nem is számítok,	ものの数にもならず、
Semmi öblében létem	（私の）存在の貝は皆無の浦に。
kagylója. Miért,	なぜ
hogy vízi útjelzők közt	澪標の間に

folyvást csak rád gondolok?　　流れて / ずっとあなたのことを思っているのか。

傍線部のように、「澪標」と「身を尽くして」の部分を独立させ、二重傍線を付した「ずっと」と「流れて」という意味もある「folyvást」という多義語を用いて、「水の道しるべ」という、「澪標」に相当するハンガリー語に含まれている水の縁語として機能させた。明石君の返歌ではその他、「水の道しるべの間に流れて／ずっと」という構文によって、二重傍線部は掛詞として機能する。両歌が詠まれた場が難波であるため、この場合は、ずっと源氏のことを思っていることが「澪標の間に」という場所で行われているという設定もありえなくはないと思われる。一方、掛詞として物象と人事の内容が完全に重なっている「江に」と「縁」、「難波」と「何は」、「貝」と「甲斐」は寓喩的に訳出してみた（波線部）。

ハンガリー語が英語と異なるものの、英語においても類似する表現方法をとることが可能ではないかと考えられる。以下、英語への試訳を紹介する。

Channel markers stand——	水標棹が立っている—
across my life I will love you.	生涯にわたり君を愛する。
It's sign is that we	そのしるしは、
met unawares in here.	私たちは偶然ここで出会ったことだ。
How deep is the bay of our fate!	私たちの因縁の江がどれほど深いものだ！
I am counted just	私は数えられている、
In the shells of Inlet None.	何も（ない）浦の貝にだけ。
Why started to flow	なぜ流れ始めたのか、
my longing for you here	私の恋慕があなたへ、
between the channel markers?	水標棹の間に？

第 3 章に掲げた歌語間の連想関係を活用して翻訳してみたが、歌語のネットワークでは「澪標」「難波江」「渡る」が関連しているため、源氏の贈歌の翻訳では澪標の縁語として、二重下線を付した「across」を使用した。こうして和歌特有の表現である縁語を使うことが可能で、先行翻訳のように内容が原典から大きく離れる恐れがないのではなかろうか。また、明石君の返歌の試訳では、二重下線を付した「flow」は「澪標」や「難波」と関連し、明石君の源氏への恋慕を表すことができると思われる。その他、それぞれの歌の波線部のように、ハンガリー語への試訳と同様、所有関係によって物象と人事を結び付けてみた。少し特殊な表現であるとはいえ、同音異義表現の物象と人事の密接な関係が伝達されるのではないかと考える。

5. 結び

同音異義表現の中には、単独の表現として物象と人事との間に類似性（①）などの内容的な関連は見出せない例が多いものの、当該歌の中に詠まれている他の物象内容によって、二重の文脈が形成され、人事内容との類似性も成り立つ（②）。このような例は外国語訳において、寓喩的に翻訳することが可能である[13)]。

当該歌の中に、このような類似性の形成を補助する表現がない場合、同音異義表現、またはその縁語と連想関係にある他の表現、物象内容によって、人事内容との関係が成立しうるといえる（③）。また、本歌取り歌の場合、新歌の物象内容が本歌の人事内容を呼び起こす装置としても機能する（④）。

外国語訳では、物象と人事との間に内容的な関係が見出しがたい同音異義表現は、原典にない内容を補って共通性を構築し、直喩に仕立てること（直喩の創作）、または人事内容を訳出するのみであるという例が多い。音の関係ではなく、意味の関係である縁語を活用しての翻訳は効果的であるが、この場合、和歌表現が正確に伝達されるよう、それぞれの同音異義表現と関連がある歌語のネットワークが役立つと思われる。同音異義表現の両方の内容は音の共通性を通して当時の人々の頭の中で結びつけられていたため、物象内容そのものも、暗示的に人事内容を表すが、異なる文化に受容される際、理解しがたい、または誤解されるという恐れがある。そのため、内容を補う必要がある場合、当該表現と関連がある歌語を用いて補い、縁語仕立てに翻訳すると、内容が伝わりやすくなると同時に、こういった日本古典和歌の歌語のネットワークも伝達される。これが正確に行えるためには、歌語のネットワークとそれぞれの表現の和歌史における変遷の解明が重要である。さらに、和歌に詠まれている物象の欧米各国の文学・文化におけるイメージや詩における詠まれ方も参考になると思われる。そこには日本の歌語と共通するものがある場合もある。そのため、同音異義表現の中、そのイメージと他の歌語との関係と和歌史における変遷がまだ十分に明らかにされていないものへ注意を払うこと、およびそのネットワークの解明とともに、こういった検討も今後の課題としたい。

註

1）本研究でいう物象は景物や情景を指し、人事は人間の感情や行動のことである。たとえば、小野小町の「花の色は移りにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」という歌の掛詞では、「降る長雨」は物象、「（よに）経る・古る眺め（せしまに）」は人事である。

2）拙稿「掛詞の外国語訳の方法について―複数の掛詞・縁語を使用した二重文脈歌を中心に―」『日本研究』（国際日本文化研究センター）60（2020 年 3 月）

3）和歌の本文と歌番号は、日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』によるが、歌の内容の関

係で必要な場合、表記を改めた。

4）時枝誠記『国語学言論（下）』（岩波書店、2007）第六章「国語美論」

5）「掛詞の基層」『国際文化研究紀要』（横浜市立大学）4（1998 年 10 月）

6）「和歌のレトリックの体系―通言語的な観点から―」『國學院大學紀要』55（2017 年 1 月）

7）「小倉百首の独自表現」『表現研究』50（1989 年 9 月）

8）『百人一首私注』（風間書房、2015）19 番歌の【余釈】項

9）佐々木信綱編『日本歌学大系』第二巻（文明社、1940）所収の本文による。

10）八雲御抄研究会編『八雲御抄　伝伏見院筆本』（和泉書院、2005）所収の本文による。

11）外国語訳の日本語逐語訳は稿者による。

12）Karl Florenz: *Dichtergrüsse aus dem Osten: japanische Dichtungen*. Amelangs Verlag, Leipzig, 1894.

13）これについて注 2）の拙稿を参照。

※引用した外国語訳は以下のとおりである。

Carter, 1991＝*Traditional Japanese Poetry. An anthology*. Translated, with an Introduction, by Steven D. Carter. Stanford University Press, Stanford, California, 1991

Cranston, 2006＝*A Waka Anthology*. Volume Two: Grasses of Remembrance. Part B. Translated, with Commentary, Appendixes, and Notes, by Edwin A. Cranston. Stanford University Press, Stanford, California, 2006

Dickins, 1866＝*Hyak nin is'shiu or Stanzas by a Century of Poets, being Japanese Lyrical Odes*. Translated into English, with Explanatory Notes, the Text in Japanese and Roman Characters, and a Full Index, by F. V. Dickins. Smith, Elder, London, 1866

Enderling, 1905＝*Japanische Novellen und Gedichte*. Verdeutscht und herausgegeben von Paul Enderling. Verlag von Philipp Reclam, Leipzig, 1905

Kurth, 1909＝*Japanische Lyrik aus vierzehn Jahrhunderten*. Nach den Originalen übertragen von Julius Kurth. Piper, München, 1909

MacMillan, 2018＝Peter MacMillan: *One Hundred Poets, One Poem Each*. Penguin Classics, 2018

Mostow, 1996＝Joshua S. Mostow: *Pictures of the Heart. The Hyakunin Isshu in Word and Image*. University of Hawaii Press, Honolulu, 1996

Porter, 1909＝William N. Porter: *A Hundred Verses from Old Japan. Being a Translation of the Hyaku-nin-isshiu*. Clarendon Press, Oxford, 1909

Washburn, 2015＝Murasaki Shikibu: *The Tale of Genji*. Translated by Dennis Washburn. W. W. Norton & Company, New York, 2015

〈付記〉本稿は、和歌文学会第 67 回大会（令和 3 年 9 月 19 日）における口頭発表に基づく。発表後に貴重なご教示をくださいました先生方に、この場を借りて深謝申し上げる。

ENGLISH SUMMARY

On the Relation between Natural Features and Human Affairs in Waka Poetry's Homophonous Rhetoric

FITTLER Áron

One of the purposes of this research is to find some methods to communicate the homophonous rhetoric of classical Japanese waka poetry into different cultures, as accurately as possible. There are homophonous

phrases in waka poetry in which natural features and human affairs have similarities in their context besides the same sound. On the other hand, there are homophonous phrases, e. g. 'miotsukushi'（channel marker; to give one's everything）or 'fushi'（joints of reed or bamboo; lie; occasion）, in which it is hard to find any common points in their content but we can find them by examining how those phrases were used in waka poetry. We can find connections between natural features and human affairs in these phrases through the established image of natural features used in waka poems, and those connected to human affairs by association. In this thesis we investigate how two homophonous phrases 'miotsukushi' and 'fushi' were used in waka poetry and attempt to categorize what kinds of connections can exist between their two meanings（natural feature and human affairs）, then consider these connections by focusing on the associative relation with other waka phrases. Afterwards, we show how 'miotsukushi' has been translated into English and German, then try to suggest some new translation methods.

Key Words: Homophonous phrases, Double meaning words（kakekotoba）, Word association（engo）, Association, Translation